

## 「東アジアジュニアワークショップ参加報告書」

京都大学文学部・2年 (氏名) 今岡 哲哉

東アジアジュニアワークショップは、私にとって忘れられない経験となった。本ワークショップは、東アジアの三ヶ国を代表する大学の学生が、社会学で関心のある題材を選んで英語で発表するものである。参加したのは、日本から京都大学、韓国からソウル大学、台湾から台湾大学であった。

五日間の行程の中で、最初の三日間はフィールドトリップ、後の二日間は研究発表であった。前半は、韓国の現状が良く伝わるものを見て廻った。例を挙げると、2014年のセウォル号沈没事件を記念する展示や、日本大使館前に設置された慰安婦像などである。後半は、先ほど述べた通り学生たちが研究内容を発表した。ちなみに私の発表は「日本における難民申請と政策の推移」についてであった。

印象深かったことを何点か紹介する。まず我々と比べて韓国と台湾の学生は政治への意欲が強かった。彼らの発表には学生運動に関わるものが多かったし、時には彼ら自身が運動の参加者だった。また、慰安婦像前のデモを視察した時に、多くの韓国人学生が署名していたのも記憶に残った。

中頃に迎えた終戦記念日も忘れることができない。部屋で何気なくテレビを点けると、韓国が制作した英語の番組が流れており、日本の戦争責任を追及する報道が延々と続いた。それから洗濯物が回収されないのでフロントに問い合わせると、独立記念日なので今日は休みだと言われた。しかし私は”Happy Holiday!”と言うことも出来ず、複雑な気持ちを抱いた。韓国の根幹には、大日本帝国の存在が未だ強固に据えられていることを実感した。

研究発表会も強く心に刻まれている。韓国と台湾の学生達は概して英語に長けており、非常に凝ったパワーポイントを作る傾向があった。我々は必ずしも研究の質において引き離されていたとは思わないが、彼らは人に伝える技術において圧倒的だった。それから各国の先生が学生の発表を熱心に聞いておられ、時に難しい質問や厳しい指摘を入れるのも印象的だった。

宿舎では思いがけない良い経験が出来た。私はある先輩と同室になったが、部屋の空き状況が関係したのか、男子二人で一つの寝台を共有することとなった。我々はほぼ初対面ながら同じ床に就くという特殊な状況に置かれたが、毎晩発表の練習がてら遅くまで語り合う内に、とても良い関係を築くことが出来た。

全体的な感想を述べると、非常に多くの刺激が得られた。多くの学生が真剣に語り合い、お互いを認め合うことで相互理解を深めることが出来た。学術面でも、先生がたの入念な指導を仰ぎ、発表会では自分の研究に対する批判的な視点を知ることが出来た。今回のワークショップは、今後の学習に対する意欲を高め、来年から始まるフランス留学に対して良い力試しになったと思う。